

いった。いろいろ迷い、考えた挙げ句に「やはり好きなことを続けるしかない」と肚はらを決めたが、一方で「剣道」への無知にも気付かされた。このことが契機となり、「剣道」とは何なのか、「武道」とは何なのか、を本腰を入れて学んでみたくなったのである。

● 武道と暴力

「武道とは何か」、この問題を解きたいと発心して約三十年間、今もなお悪戦苦闘の日々が続いている。「武道」に織り込まれているメッセージをどう読み解くか、それが問題なのだ。

まずは、「場」の問題である。

「打つ、突く、投げる、蹴る」といった行為は、一般的な感覚から言えば、暴力行為である。一般社会で実行すれば、すぐ警察沙汰となる。しかし、道場では、それら一見野蛮な行為に磨きをかけ「技」として昇華させる場として、日常生活の場とは一線を画している。同じ行為でありながら、武道ではそれらの行為の前後に、「お願いします」「ありがとうございます」と「礼」を述べる。稽古相手のみならず、それを行う「場所」に対しても「礼」をするのが当たり前になっている。

そのような「礼式」は、武道の種目や時代によって異なるが、日常的な場と特殊な場での「気分」を転換させ、日常世界と非日常世界との間を峻別させる装置として重要であり、遵守すべき行為なのである。「礼式」によっていわば「結界」された「道場」という場では、日常での暴力行為が、相手を通じて自分自身を見つめ、確認、反省する行為へと意味変換がなされるのである。このことは、武道経験者にとっては自明のことであるが、一般の人たちにはなかなか理解してもらえない。

ある知り合いの女性が私にこのようなことを言った。

「私の娘が合気道部に入ったのだけれど、それって愚連隊の人たちがやっているんでしょ」
インテリの彼女の言葉とも思えない質問に、私は一瞬、啞然としたが、気を取り直して合気道の何たるかをとくとくと説明した。しかし、彼女は得心のいかない顔で帰って行った。幸い、数年後にその娘さんが合気道を通じて知り合ったすばらしい男性と結婚したことによる、彼女の合気道に対する偏見はなくなったようである。

そういえば、私が高校時代に柔道部から剣道部へ転部した時、母親から「あんな重たい竹の棒で頭叩かれたら、たわけになる」と忠告されたことを想い出した。大学受験に失敗し、東京に出て合気道をやってみたい、と言ったら、両親は絶句し、兄は烈火の如く怒ったもの

だった。

大学に入学後、体育学科、健康教育学科、武道学科の全一年生が、水泳実習で合宿訓練をしたときにも、武道への偏見とも思われる出来事があった（ヒョットしたら武道ではなくて武道学科の学生そのものへの偏見だったのかもしれないが）。宿舎に着くなり、我々武道学科生だけが集められ、いきなり実習担当責任教官から、

「武道の連中は悪さをする者が多いから注意しておく。門限は厳守すること、変な歌を大きな声で歌わぬこと」

といきなり申し渡されたのである。

「体育会系即右翼」と思われていた時代であり、その体育会系からも武道系は変な集団だと思われていたのだった。

では現在はどうか。

埼玉大学における一般体育実技受講者二百人のうち、バスケット、バレエ、卓球、ソフトボール、ゴルフ、剣道（柔道）の六種目のうち、武道種目選択者は、この五年間平均をみると五人程度といった状態である。体育専攻生の中で武道種目以外の学生が武道を選択する割合も、急速に減少の傾向にある。剣道部主催の寒稽古に選択必修の剣道受講生を参加させ、

活動の一端を理解してもらおうとすれば、同僚から非難を浴びせられかねない。

近年、昔ほどあからさまな偏見は少なくなつたものの、「武道Ⅱ暴力Ⅱ右翼」といった図式の認識が完全には払拭はつしよくされていまいというのが現状ではないだろうか。

今も、大学という「インテリ集団」の中にあつて、「武道」の居心地は決して良いものではない。

ある時、ルポライター本多勝一氏の講演会が埼玉大で開催された。その時、その取り仕切りをしていた、私とは比較的親しい某教授に、

「この会場に、もしかしたら右翼が来るかもしれないので、本多氏のボディーガードをやつてくれませんか」

と依頼された。何で私がボディーガードを、と思つたがとりあえず引き受けた。しかし「内裏うちら」の「左兵衛さひょうゑ」になつた気分には到底なれず、最後まで複雑な気持ちであつた。

武道をやつたことのない人の武道への見方には、まだまだ厳しいものがある。しかし、最近の傾向として面白いのは、「剣道」の授業を「柳生新陰流をやつてみませんか」と勧める、と、三、四十名がさつと集まつてくれるという現象である。何かが変わりつつあるようだ。